

◆連載◆がんの時代 4

がんがなくなった気持ちの良さ

リズベット・U

私が受けたのは、「乳房温存術」と呼ばれている方法だ。以前はハルステッド法といって乳腺から胸筋からリンパから根こそぎ取ってしまう手術がほとんどだったが、いまやがんとその周辺のみを摘出してなるべく乳房の形は残そうという考え方が主流になってきている。乳がん手術のスタンダードな方法であり、病院評価の類をみると、この「乳房温存術」を何例行ったかが病院選びのひとつの指標になっている。しかし「温存」の言葉に惑わされてはいけない。その言葉から手術してもおっぱいの形がそのまま残るような印象を受けるが、実はそんなことはない。乳首の位置が違ったり、膨らみがいびつになったり……。そういう例はほとんどあり、こんなはずじゃなかった……と悔やむ声もたくさん耳にする。

実は、私はあまり形のことにはこだわっていません。ともかくがんをきちんと取ってもらわないといけない、という気持ちで強くてそこまで気が回らなかったというのが正直なところ。私のがんは直径一センチ前後の小さなものだったが、手術ではその周辺も含め、直径六センチほどを摘出した。けっこう広範囲である。

手術が終わって最初の夜は、まだあちこちに管が入っていて寝苦しかった。傷というより、じっとしていることで体の節々が痛むのだ。一時間ごとにナースがチェックしに来るので、それもまた落ちつかない。もちろん来てくれなければもっと不安である。彼は病室に泊まってくれていた。夜中、少しでも私が動く気配があると、さっと起きあがって側に来て顔を覗き込んでいた。「痛くないか」「大丈夫だよ」と会話もできた。でも彼は泣いていた。どうしたのという、「お前がかわいそうで……」と、言い、ボロボロと涙を流していた。男気が強く弱

みを見せない人なのにと、私のほうが驚いた。あとで聞いたところによると、術後すぐに、家族は主治医から摘出した部分を見せてもらい説明を受けるのだが、そのときにも彼は泣いていたという。

翌日の朝は、酸素マスクも取れ、尿道カテーテルも外れ、自分でトイレに行けるようになった。今は、昔と違って離床が早く早い。もっと大きな手術をしても、翌日には積極的に動かそうとする。「安静に」というのは、本当に必要最小限にしなければ、機能の回復が遅れてしまうのだ。また、腕を上げる練習もさっそく始まった。どうしても術後に腕のしびれや違和感が残るので、これまた痛くてもどんどん動かさなければいけない。私の主治医はもとも甲狀腺を専門としているため、細やかな手術が得意だったのだろう。ありがたいことに術後すぐに私の腕はほとんど難なくまっすぐにあり、皆を驚かせた。二日、三日と時間が経つごとにみるみる元気になっていく。食事もおおいしく、精神的に沈むこともなく、がんがなくなった気持ちの良さともまた元通りの生活ができるという確信に満ちていった。

術後六日め。退院である。というかその夜仕事があったので、どうしても当日の朝には病院を出たかった。最初からそう話していたのだが、なにせ病院は忙しい。そんな希望は誰も覚えていないだろうとわかっていたので、もううろさいくらいに来る人来る人に「退院したい」と申し出ていた。やっと主治医が当日の朝、なかばあきれたようにOKを出してくれ、心底ホッとした。以前より少し小さくなった胸に、術前から用意しておいたソフトブラジャーをつけ、講演用の服を着て化粧をした。外見上は手術したばかりにはとても見えない。私にとって社会的リハビリの第一歩だった。

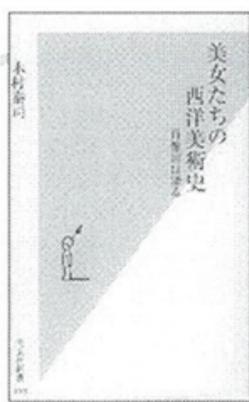
本をつなぐ 4

名古屋地域の南山会 服部冬蔵

歴史を考えながら自画像をみる

私たちはその永い人生を送るうえで、常に愛する人や尊敬できる人とともに生きていこうと考えています。そして、それらの人のイメージをこわさずに抱いていきたいと思っていると云えます。これは時代や民族を問いません。

私たちが肖像画をみると、モデルとなつて人物への画家の思い、あるいは、モデル自身の人間性が表現されていなければなりません。古くはローマ時代に「アウグストス」の像を刻んだコインがありましたが、これらのものは絵画とし



美女たちの西洋美術史  
肖像画は語る  
著者：木村泰司  
定価：1092円  
発行：光文社  
ISBN978-4-334-03596-9

ての肖像画とは違い、記念碑的な感覚でつくられたものです。宗教画としての聖母マリアやその母子を画いたものはみられますが、人間性をアピールする肖像画として画かれたものではないようです。いわゆる肖像画が出てくるのは、経済的にゆとりができてきたルネッサンス以降です。題材としては、歴史や神話にもとづいて画かれたものが多く、その後、それぞれの時代における王侯、貴族をはじめ土地の有力者が対象となつていきます。この本に出てくる肖像画の主人公たちは、ヨーロッパ史を彩った美女たちですが、これらの画は私たちに何を語りかけているのか、また、画家は私たちに何を伝えようとしているのか、歴史を考えながら肖像画をみるのも楽しいものだと思います。

◆本文中の肖像画はカラーです

▲「本をつなぐ」原稿募集中！

その本を知ったきっかけを入れて、おすすめのコментарを600字程度でまとめ、有限会社ゆいぽと（表面参照）までお送りください（メール、ファクシミリ、郵便で受け付けます）。採用の方には記念品も準備しています。

編集後記

手さぐりで始めた新聞づくりも二年目に入りました。おかげさまで4号をお届けすることができました。名古屋では二月六日に知事選、市長選、市議会解散の是非を問う住民投票のトリプル投票が行われ、一市民として政治ってなんだろうと考えさせられました。選挙活動で街がにぎやかだったころ、私は百人の方の人生と向き合っていました。二年に一度めぐってくる幸せな仕事、「東海の日職一芸」の編集です。だれにとっても、最初からの「天職」はありません。やむを得なく継いだ家業が「天職」だったり、時代の波にもまれるなかで「天職」にめぐりあつたり、なかには定年後に「天職」を見つけた方もいらっしゃると思います。戦争や自然災害、不況に翻弄されながらも、地に足をつけてたくましく生活してきた百人の記録に、おおいに勇気づけられました。

近々書店にお目見えする「東海の日職一芸③」には、登場する百人の天職人ももちろん、取材を続けるオカダミノルさんと茶畑和也さん、連載の場を提供してくださっている毎日新聞社のみなさんの熱い思いが詰まっています。その思いが、本という形をとおして、たくさんの方に伝わることを願っています。(山)

お知らせ

ゆいぽとでは、みなさまの作品や経験を本にするお手伝いもしています。随筆集、紀行文、自分史、歌集、句集、写真集、絵本などを作りたいとお考えの方は、お気軽にお問い合わせください。

編集・出版 ゆいぽと  
TEL 052-955-8046  
Eメール yuiyama107@wine.ocn.ne.jp

「ゆいぽと」バックナンバー

- 創刊号インタビュー／横幕真紀さん（『ずっとそばにいるよ』著者）  
「ありがとう」を伝えたい！
- 2号 インタビュー／斉藤とも子さん（『きのご雲の下から、明日へ』著者）  
「きのご会」を次世代につなぐ
- 3号 インタビュー／堂本暁子さん（『生物多様性』著者）  
「COP10」の成果を未来につなぐ

\*ご希望の方には送ります。無料です。